



突然の「臨時休業要請」の中で 「教育」を考える

春山宜紀

県立高校に勤務しています。「高校の様子を知らせて！」という原稿依頼を受け、本日3月19日現在の状況を紹介します（各高校の知人の話も入れます）。

2月27日（木）夕方、突然に首相から小中高校の休業要請することが発表されました。この発表までは誰も休業とは考えずに3月までのコロナ対策をしてきたため、この臨時ニュースは大変な衝撃でした。そして、翌日の午後になってから県教委の判断が示され、翌週3月2日（月）からの休業が指示されました。まさかの「28日金曜日で学校、終わり」「一同啞然」です。この日の生徒の声を一部紹介します（複数の高校から）。「あまりに急！」「卒業式は？」「部活はどうなる？」「荷物持ちきれない！」「オリンピック無理でしょう」「政府がクルーズ船でミスるから」「3月の定期演奏会が中止だなんて！（号泣）」

その後の学校の様子は各報道でご存じと思います。そこで以下には、私の4つの視点を紹介して「教育」についての議論を広げられたらと思います。



1 教育職員の主体性とは？

今回、多くの国民から「嘘つき」と思われている首相、政府からの指示であったため、突然の決定、発表が上意下達で行われたことに違和感を持った人が多かったのだと思います。県教委は「国からの要請、県知事の判断」という理由で各高校に指示を出しました。しかし、県教委は独自に検討し、その判断根拠を詳細に示すべきだったと思います。教職員は日頃から生徒に「受け身はだめ、情報を自身で判断し、主体的に行動すべき！」と話しています。しかし、私たちは「流れで」決定に従うことになり、モヤモヤ感が強く残りました。論理的には、「もしも突然の休業が適切であったならば、それまで全くそれを考慮しなかった群馬県、県教育委員会は責任を果たせていなかった。」となります。これは群馬とは対照的な行動を取った島根県と比較すると明らかです。島根県は独自に見解を発表し、独自の対応を行いました。これが本来の教育行政のあり方であると思います。

私は個人的には県教委へ質問を出すことし

かできませんでしたが、一連の流れを体験して、戦前もこんな感じで次々に指示が来て従うだけだったのかと想像しました。

2 ショック・ドクトリンを 生徒たちに教えてきたか？

「ショック・ドクトリン」はカナダのジャーナリスト、ナオミ・クラインが2007年に著した書籍名「The Shock Doctrine: the Rise of Disaster Capitalism」です。彼女は、衝撃的な事件（自然災害、テロ等）を利用して徹底した市場原理主義（災害便乗型資本主義）を実行しようとする思想の危険性を指摘しました。平たく言えば「非常事態だ！議論の余地はない。一致協力しよう！という政府の指示で、悪法を通す方法」となります。現在、特別措置法はじめ各種法律ができていますが、私権、報道、集会への制限など多くの問題を含み、注意すべき法律だと思います。

ショック・ドクトリンを紹介した堤未果氏は「政府はウソをつくもの、議論のない時が危険」といったアメリカの例を多数、紹介しています。私はこれまで彼女の著作を生徒に

紹介してきましたが、これはコロナ騒動を考える視点としても重要だと思います。

「要請」直後の「コロナ対策へ予備費 2700 億円を投入」と聞いたある人は、それだけの税金を使えるならば学校の水道水を温められるようにした方が良く、と指摘しました。家では温水を使うのが常識でも、学校では冬の冷水が見直されていません。そのため、20 秒以上の手洗いが徹底されない状況があります。生徒にも考えさせたいテーマです。

古川美穂氏「東北ショック・ドクトリン」も参考になります。地元民の意思を無視して進む「復興」の実態を描きます。地元の意向を重視する岩手県の達増知事に対して、宮城の村井知事は「上からの復興」です。東北復興費 19 兆円の行方に注目です。

緊急事態時に人々はどのように対応するのか、情報チェックをどのようにするのか、これまでの教育が問われている、と私は日々感じています。



3 「常識」に向き合えるか？

今回の混乱を通じて「社会や学校に本当に重要なことは？」と考える人が増えたと思います。例えば、「小学校卒業式への膨大な労力は必須？」「クラス定員 40 人は密集では？」「教職員がウイルス対策を常に指示？高校生自ら情報を整理して対処を決めさせては？」「野球部は特別？高体連と高野連はなぜ別？」「部活動の制度設計をすべきでは？」部活動については今回、学校が休業となり、

部活のない勤務を初めて体験している職員が多数います。皆さん「部活がないとこんなに時間があるのか!」と実感を述べています。早稲田大の中澤篤史氏は「新任先生は3年間、授業研究中心、部活指導は後から」と指摘していますが、現在まさにこの状況が生まれており、職員の常識を揺さぶっています。

4 生徒の気持ちを尊重しているか？

今回、「突然、最終回」となってしまい、当の高校生たちがどのように感じているのか、詳細が分かりません。現在、各高校では週1回程度の登校日があり、私も生徒の話の少しだけ聞くことができました。生徒たちはいくらでも話したいのです。学校はもっと機会を設けて子どもたちの思いを表現させる必要があると感じています。一連の流れから思うのは、子どもの権利条約で示す「意見表明権」の軽視です。職員も生徒もコマのように扱われている感じがします。教育の根幹は生徒の声を聞くことですが、どれだけの人が意識しているのでしょうか。

幾つかの学校の卒業式式辞を読むと、「ピンチはチャンス」とか、「在校生がいない分、より思い出深い特別な卒業式にしましょう」という内容が語られています。これらはいわゆる「ポジティブ思考」と思われますが、生徒の実感にもっと近づけてよいのでは、と思います。悲哀感情など、もっと生徒に寄り添った言葉が紹介されてしかるべきと思いました。

私は先日、石川達三の「生きている兵隊」を読み、戦争での兵士の言葉について興味を持ちました。戦争はじめ人間性を破壊する状況は先ず、「実感から出る言葉」が消されていくことから広がっていきます。今日のニュースで言えば、森友文書改竄事件で自殺に追い込まれた赤木さんの遺書が政府によって無視される、という状況があります。

非常時であるからこそ気持ちを重視した対応が求められるのだと感じています。